

[宮崎演習林]A. 前年度より引き続きおこなっている 試験調査：モミ稚樹発生及消滅本数調査

汰木, 達郎
九州大学農学部附属演習林：助教授

荒上, 和利
九州大学農学部附属演習林：教務員

椎葉, 康喜
九州大学農学部附属演習林：林業手

<https://doi.org/10.15017/1462115>

出版情報：演習林研究経過報告．昭和46年度，pp. 149-150，1972．九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：



年 月 日	成 虫 数	年 月 日	成 虫 数	年 月 日	成 虫 数	年 月 日	成 虫 数
4 6. 4. 7	23	4 6. 7. 7	517	4 6. 10. 6	109	4 7. 2. 2	1
14.	35	14	339	13	48	10	0
21	31	21	187	20	145	16	0
28	37	28	130	27	261	23	0
5. 6	165	8. 4	53	11. 4	52	3. 1	0
12	83	11	30	10	14	8	7
19	110	18	92	17	10	15	31
26	207	25	387	24	6	23	31
6. 2	386	9. 1	調査不能	12. 1	5	29	29
9	213	8	925	1 8	2		
16	287	15	636				
23	698	22	246				
30	1,011	29	170	この間	0		

この調査結果をみると、5月下旬からのサナギの発生、6月下旬の白虫の発生、7月の赤虫の増加、また成虫については6月下旬の増加、9月中旬の増加と前年とほぼ同じ経過である。

A-3 モミ稚樹発生及消滅本数調査

前年に引き続き昭和46年4月から47年3月までの発生及消滅本数を下表に示す。

() 内本数は試験地設定時の稚樹

	昭和46.4現在数	消滅本数	発生数	昭和47.3現在数
A 1.	12 (10)	7 (5)	1	6
2.	22 (12)	6 (4)	2	18
3.	7 (7)	2 (2)	1	6
B 1.	41 (33)	1 ()	8	48
2.	73 (47)	7 (1)	5	71
3.	21 (11)	10 (7)	3	14
C 1.	38 (14)	21 (11)	0	17
2.	21 (12)	1 (1)	1	21
3.	33 (26)	9 (6)	0	24

発生消滅本数を月別にみると

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3 月
A	1		-5	+1		-1			-1				
	2		-3	+2	-2					-1			
	3		-1	+1		-1							
B	1			+8								-1	
	2		-4	(+5 -1)		-1	-1						
	3		-2	+3					-1	-5		-1	-1
C	1		-16	-2	-3								
	2			(+1 -1)									
	3		-2									-4	-3

これによると前年と同じく発生数はB区が多く、その数は前年とくらべてかなり少い。これは前年がモミ球果の凶年にあたったためではないかと思われる。

消滅稚樹は前年とは反対に半数以上が試験地設定時にあった稚樹であったことから稚樹発生後数年にしてそのほとんどが徐々に消滅していくことを証明するものであろう。

発生月は6月が多く、消滅月は5月が多いが、これは前年4月の雨量が350mmに対して、本年4月は70mmとはるかに少なく、土壌がかなり乾燥したためではないかと考えられる。

A-4 スギ列状間伐試験

間伐は造林保育作業のうちで、きわめて重要な作業の一つであるが、山村の過疎化による林業労務者の極度の不足と、これにともなう労賃の高騰、さらに加えて間伐木の売れ行き不振は間伐の実行を困難にし、手遅れ林分を増加させている。

また従来の単木的な間伐木の選定では間伐木の集運材の機械化につねに大きな困難がつきまわっており、間伐の実行をますますむずかしくしている。そのため集材方法について種々の改良開発がなされているが、単木的な間伐法をとるかぎり、限度があると考えられる。

したがって間伐法そのものを間伐木の選定、伐採、集運材の全作業をひつくるめて再検討せねばならない時期にきていると考えられる。

従来の間伐木選定方法は、かなり複雑でやゝもすると名入芸的なものになりやすく、その実行も小面積はともかく、数十haにもおよぶような大面積の場合はなかなか困難で、これが間伐の手遅れ林分を増加させる原因の一つにもなっている。このようなことからこのからの間伐はわ